

## 解答

問一 ア 問二 ウ 問三 a ア b イ c ア 問四 ア

問五 花も見ないで酒ばかり飲んでいる〔状態。〕

問六 ロンドンでも東京と同じく都心から離れたところに住居があるため、外出中の夕刻、簡単に家に立ち寄ることはできないということ。

問七 X イ Y エ 問八 日本の若者

問九 その後の予定に備えてリフレッシュできる〔から。〕

問十 ウ、エ、カ 問十一 A エ B イ C ウ D ア

問十二 自分の人生で最も誇らしい瞬間のひとつに数えている

問十三 エ 問十四 エ

問十五 日本人は偉大な発明をしているが、それが文化や生活の奥深くにまで浸透しており発明だと思っていないから。

問十六 まず、サイ

問十七 A 夢想 B 提案 C 清潔 D 保 E 特有  
F 強調 G 費用 H 効率 I 動機 J 一変

## 解説

問一 次の行に「どういうわけか、そう決めてしまった」とあります。週休二日は、特に根拠もなく、いつのまにかそうなくなってしまっていた、というのです。しかも筆者はこのことを、「実に素晴らしい思いつきではないか」と称賛しています。

問二 「花（桜）を見る」ということの意味を考えると、列挙していることからの中で最も重要なのは、傍線次の行の「長い冬の後で、実に身も心もほぐれるようなイベントだ」の部分だと読み取れますね。春の到来を喜ぶイベントであるわけです。また、筆者は「花見」を、「新入生や新入社員を迎え入れ」「親交を結ぶための」会だとも述べています。

問四 傍線次の行の、「組織がどのように～活用されるものなのか」という言い回しは、軽い皮肉のまぎった、ユーモラスな表現になっています。会社の業務が終わるまで「席取り」をするのは、上司の面々が、終業後すぐに飲み会を始められるようにするための手間であり、しかも、入ったばかりの新人はまだ会社の仕事を覚えていない分、こうした奉仕活動で少しでも役に立ち、会社内の人間関係のあり方を理解していかないといけない、ということを描いています。

問五 傍線の2行前「昼間から～張り上げること」に書かれているのは、「深酒をすること」「みっともない酒の飲み方をすること」だと読み取れます。これが「花を見る」というもとの意味からかけはなれている、というのです。「花見」が「花を見て楽しむ」ということであるのは自明ですが、酒を飲みながらの「花見」は「酒を飲むこと」ばかりが先立って、肝心の花をろくに見ていない、と筆者は嘆いています。

問六 「事情」が何を指すか、ですが、傍線直後に「しかし、ロンドンには銭湯がない！」とありますので、「銭湯」が必要な「事情」であることがわかります。ロンドンは傍線直前の「東京」と同じ事情を持っているのですが、前文の「大半の人が仕事や遊びの場からずいぶん離れたところに住んでいる」だけでは、（それでなぜ銭湯が必要かわからないので）内容的にも、そして字数からも不十分ですね。世界の大半の中規模以下の都市では、「仕事や遊びの場」と家とが離れていないので、汗を流そうと思ったら外出中でも家にちょっと戻ればすみませんが、東京やロンドンでは、距離があってそうはいかない。（そこで、外出中のリフレッシュに日本の「銭湯」が活躍する、というわけです。）この、「家に簡単に戻れない」というところまで、「事情」としてまとめましょう。

問七 「収支」は「収入と支出」ですから、Xは経済的な視点です。また、ロンドンの文化の中にはこれまで「銭湯」なるものはなかったのですから、それがいきなり街なかに出現しても、人々はとまどい、受け入れられるまでにさまざまな抵抗があるでしょう。それが「文化的障壁」と表現されています。

問八 「マーケティングのミス」で、次々と「銭湯」が閉鎖されている、だから宣伝しなさい、と述べているのですから、「銭湯」にいま現在行かない人を答えればいいのです。すると、二つ前の段落の「日本の若者の多くが銭湯に行ったことがない」に着目できますね。

問九 理由は、直後からの三行に書かれていますが、指定字数が短いのですから、本当に要点だけを答えなくてはなりません。「いちばん」という言葉と呼応する「最高の場所」に着目しましょう。このとき、「リフレッシュする」を「リフレッシュできる」と言い換えることが、銭湯の素晴らしさを述べるためには重要ですね。

問十 日本の新書刊の「素晴らしさ」を選ぶので、イギリスの本の特徴と日本の新書刊の特徴とをしっかりと読み分けましょう。特に注意しなければいけないのは、ウです。「付加価値を高めようとして」いる、「中に詰まっている言葉や思想」を、外側ほど重視しない、ということを、イギリスの本の欠点として、日本の新書刊との比較において筆者は述べているので、このことの裏返しは日本の新書刊の特徴ということが出来ます。

問十一 A 店の中で「拍手喝采」したとは普通考えにくいので、これは心の中で行われたと読み取るのが自然です。 B 「こともある」という文末に着目します。 C 「～だけで」に着目します。 D 「できっこない」のような、「打消しの言葉」を導く言葉です。

問十三 かかる言葉の直前にまで、「いかに」を下げた読んでいくとわかります。

問十四 傍線直後から、6ページの第一段落まで、「広重や北斎」のよさを、様々な角度から説明しています。まずひとつは、彼らは、卓越した技巧を持ちながら、一握りの大金持ちのためではなく、一般の多くの人々のために描いていること（「版画」なので大勢に売ることが出来ます）。二つ目は、彼らは「人々になじみのある風景を描いた」こと。「なじみのある」というのは、その時代時代で「人々の心をとらえたもの」でもあるので、それはすなわち「時代の記録」と言い得るものになること。このように、ふつうの人々のために描いた浮世絵師のありかたに、筆者は心引かれ、共感しています。

問十五 答のポイントは、文章冒頭の「発明」とはどのようなものか、筆者の考えが書いてあるところにあります。「本当に偉大な発明は『発明』とは認識されないことが多い。文化や生活の奥深くにまで浸透しているため、発明だと気づきもしないのだ」と筆者は述べています。日本人が、自身を「優れた発明家」とであると気づかないのは、日本人が生み出してきたものや事柄が、自然に「文化や生活の奥深くにまで浸透して」いて、自覚されていないからだとして述べているのです。

問十六 「いろいろ困ったこと」ですから、「困ったこと」が複数書かれている段落のはじめに戻します。すると、イギリスの本の現状に対して困っている、いくつかの点を挙げ連ねた4ページ二段落目に着目できますね。